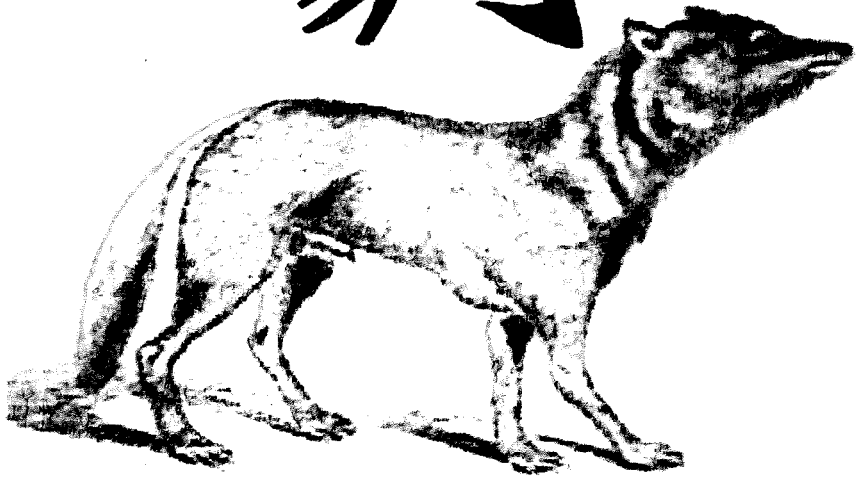


文藝小説  
豹



中野與一 著

# 目次

- (一) 山犬との出会い
- (二) 大台の山犬
- (三) 狼と山犬の文献
- (四) 久馬造と犬

## (一) 山犬との出会い

私は子供のころ二回、山犬を見た。初めは小学三年生（昭和九年）のときだ。

前の日、先生から早出の当番を言いつけられていた私は、朝早く家を出た。

小学校までのみちのりは小一里（約三籽米）程離れており、途中人の住む家はなく、淋しい山道が続く。普通登校するときは、部落のはずれにあるお地蔵さんの広場にあつまり、上級生が引率して学校に行くように取り決められていた。

でもこの日は私ひとりだった。小心者の私は、誰一人通らない山道を心細い思いで道を急いだ。季節は三月初旬だが冷たくて寒い朝だった。

前日の雨で山道は凍っていた。歩くとざくざくと霜柱をふみ砕く音がする。白い息を吐きながら急ぎ足で歩き、ふと向こうの山を見ると、大きな犬がこちらを向いて立っているのが目に入った。そして突き立った耳に鋭い目をしてこちらを見ている。立ち止まった私は一瞬に「狼だ！」という思いが頭を駆け巡った。

父は子供の頃、日高（和歌山県日高地方）に住んでいた。そして其処の住人から「奥山で狼を見た」という話を聞いたそうなの。その話が瞬時に私の頭を過った。「アーツ」という声なき叫びを發した私は一目散に來た道を引返した。

気が焦るが足がもつれて前に進まない。どれ位走ったか無我夢中で駆けていくと前方から二人の上級生が歩いて來るのが目に入った。

「どうしたんか？ 與「ちゃんー」という声が聞こえた。「はっ」として私は前を見ると六年生の光ちゃんと菊ちゃんが立っている。私は「はあーはあー」息を切らしながら見てきたことを早口で話す。光ちゃんが、「今頃狼らおらんぞ、犬と違うか？」と言つて菊ちゃんを見た。菊ちゃんは「ふーん」と笑いながら私の顔を見ていた。この日は丁度光ちゃんも菊ちゃんも早出の日だったらしい。結局、私は二人に連れられて無事登校できた。

それから三年が過ぎ、私は小学六年生になっていた。

ある日、姉に誘われて松茸を採りに行くことになった。稲刈りが既に終わり晩秋の頃である。もうこの時季は旬遅れで松茸が減多に見られないが、時偶遅生えの大きなものが生えていることがある。我が家の鉢巻山は松茸がよく生える。

茸採りの好きな姉は今日私を誘つたのは、一人では淋しいと想つたからだろうが、山に着くともう私を見向きもせず山を駆け登つた。

松茸は蒼から傘を開くと裏側は白く見えるので、山の下から見上げながら探すのが忽である。

私は山裾からゆつくり登つて行つた。頂上まで登つたが見付からない。周囲を見渡したが姉の姿も見えない。一度大声で姉を呼んだが返事がない。仕方がないので私は更に奥の方へ進んで行つた。鉢巻山は低い山だが山伝いに進むと大峰山に連なり、樹木が生え繁る深い山となる。私は未だ行つたことがない奥山を目指し、笹や羊朶をかき分けながら進んで行つたが、その辺は松の木の少ない雑木林であつた。松茸が生えるような場所ではない。

あきらめて引返そうとしたとき、不図何かの気配を感じたので前方を見上げると岩の上に犬が

立っている。そして私の方を見ている。

恐ろしさがあったが勇気をだして見返してみるとやはり大きな犬だ。毛が茶褐色で耳がそば立ち白い眼をしている。私は瞬時に以前の狼に似た犬を思い出したが、「何も怖がることはない」と自分に言い聞かせながら来た道を引返した。然し一旦背を向けると急にこわくなり足早に山を降りて行った。

そして途中、大声で二回姉を呼んでみたが返事がない、漸く麓まで下った処で姉の姿があった。「どうしたん？」と聞いてきたので、松茸は無かったと言つて犬のことは言わなかった。

## (二) 大台の山犬

成人した私は、和歌山市内の鉄鋼会社に勤めていた。

昭和二十五年、朝鮮戦争が始まった頃から製鉄業が盛んになった。「鉄は産業の米」と持て囃された頃である。私の会社も社業拡大のため高炉の建設を急いでいた。その為、多数の業者が工事に参入して建設に加わった。

そしてその業務に携わる社員と業者の交流が盛んになり、懇親という名の許に飲食店での会合がもたれることがあった。私も職掌柄業者との接触があり、和歌山市内の新内<sup>あうち</sup>方面での飲食の機会があった。

新内とはJR和歌山駅に近い場所で、昔はネオン瞬く遊郭の街であったが、売春法規制と共に業

種が一変し、大小様々の飲食店が出現した。そして新内は社員と業者が懇親する最も手頃な場所であつた。

酒量の少なかつた私も、夜の街を飲み歩く癖になつて、しばしば新内方面をぶらつくようになつた。そしていつも立寄る安価な赤提灯に何回か通ううち、店主と親しくなつた或る日のこと、偶然に出会つた人物がいた。

当人は奈良県大台ヶ原山麓に住んでいる勤め人で、営林署関係の仕事をしているらしい。

毎年晩秋になると、勤め先の人達に手伝ってもらい、生活用品を大台ヶ原の山頂に運び上げ、あとは一人で山中で過ごし、山頂での気候風土、動植物の生態などを観察するのが主な仕事であるらしい。

いつも客足の少ない店であつたが、当夜は夕方からの雨で、客は私達二人だけで話しがはずんだ。大台の住人の名前は忘れてしまつたが、話し方から朴訥ぼくちやうな好人物であることが伺われた。

大台ヶ原は標高一、六九六米の高地で、日本百景・日本秘境百選に選ばれており山全体が特別記念物に指定されている。

私も過去二回登つたことがある。山上の高原は広大で、大本が鬱蒼うつさうと生え繁る処もあれば、立枯れた巨木が亡霊の如く立ち並ぶ処もある。又、直径一米に達するかの倒木が横たわり、厚い苔に覆われ通路を妨げている。

又、草原地帯には鹿の群れが我がもの顔に飛び廻り、人を恐れることがない。湿地には此処だけにしか生えない天然記念物の植物もあつて、何れも秘境にふさわしい情景を見ることができ

こうした人里から遠く離れた山中で一人生活するには、心身ともに堅牢で強い意志がないと勤まらないだろう。

彼の話では、最初の一年（十月から翌年の四月迄）は想像できない程恐怖と孤独におそわれ牀が震え眠れぬ夜を過ごしたという。

それでも年を経るごとに多少の天変地異があつても、我が身に危険を覚える事態がなく、又、熊や猪に襲われた経験も無かつたので、寧ろ高原の神秘的な環境のなかでの生活は、今では馴れ親しんでいるとのことであつた。

大台の冬場は、殆ど曇り勝ちの天気で、雪の日が多く、風の強いときは猛吹雪が荒れ狂い、地上では想像できない形状となる。又、冬日にも拘わらず、強い稲光りと共に雪鳴が轟いたと思うと、巨木の頭上に落雷があり、肝を冷やすこともあつた。それでも時偶風もなく、天上に雲一つない静かな夜、戸外に出てみると、空には満天の星が輝き、得も知れぬ光景が見え、快感を味わうこともあるという。

夜は天候以外にも様々な事態が<sup>しめたい</sup>出来る。昼間、我が物顔に飛び廻っていた鹿が、日が暮れると鳴りを潜め姿を隠す。夜になると得体の知れない生き物が出沒する。雪も止み風もない静かな夜、「がさこそ」と動き廻る音がするが何ものか確かめた事が無い。頑丈な屋内に籠り夜をあかす。

一度物音を聞いた朝、戸外に出て見渡してみると、積雪の上に獣の通った跡がある。犬か熊か四つ足の足跡だ。この辺には鹿の他、猪や狐、狸が出沒するがそれらの足跡ではない。念のためカメラを持参して形状を写しとつた。

大台ヶ原で目にした動物といえ、鹿のほか野兎や栗鼠リスなど小動物だけだ。狼という天敵のない時代、鹿にとつては天国だが、現状では数が増えすぎてテリトリーを広め、麓の植林地迄降りていき、植樹の芽を喰い荒らす公害動物となつてゐる。

以前彼らは村落に住んでいた頃、長老の語つた話では、昔、大台の山野に何回か熊が現れたらしい。又明治の中頃まで大峰山から大台ヶ原にかけて狼や山犬が住んでいて、鹿や野兎を襲つて生きていたという話を聞いた。

二月初旬、厳冬のある夜、夜中に犬の遠吠えを聞いて目が覚めた。息の長い鳴き声が二、三回続いたあと途絶えたが鳴き声が気になつた。

昔、長老から聞いた狼や山犬の鳴き声と一緒に。以前職場の人からも大台で山犬を見たという話を聞いたことがある。報告日記に前日に見た足跡と共に遠吠えのあつたことも書き止めねばならぬ。

大台の住人に聞いた話の概要はこれで終りだが、この物語はいつ迄も私の頭に残り、忘れられない記憶となつた。

### (三) 狼と山犬の文献

私は卒寿を迎えた頃、子供のとき出会した山犬？の想い出と、成人してから大台ヶ原の住人に聞いた遠吠えのことが気になり、狼や山犬はどのように実在していたのか気になり、資料を取り寄せ調べてみた。そして文献の内容を抜き出して書いてみると次の通りである。



## 〔日本狼〕

### ■概要

一九〇五年（明治三十八年）一月二十三日に奈良県東吉野鷲家口で捕獲された若い雄が最後の生息情報とされている。

一九一〇年（明治四十三年）八月に福井城址にあった農業試験場で撲殺されたイヌ科動物が日本狼であったという論文が発表された。

群馬県高崎市で一九一〇年三月二十日発行の狼狩猟の雑誌「獵友」が発見された。

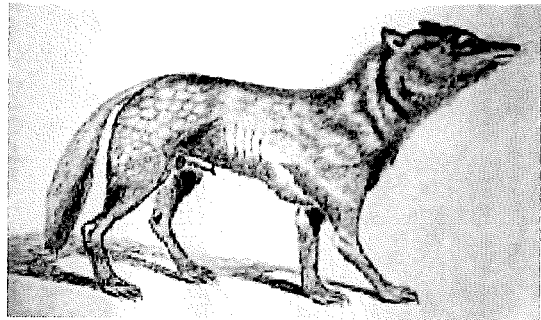
### ■特徴（写真）

日本狼は脊椎動物亜門哺乳類綱ネコ目（食肉眼）イヌ科イヌ属に属する絶滅種。体長は九十五〜一二四糎米、尾長約三十糎米、肩高約五十五糎米、体重推定十五キログラムが定説である。

日本狼は他の地域の狼に較べて小さく、中型日本犬ほどだが、中型日本犬より脚が長く脚力が強かったと言われている。尾は背側に湾曲し、先が丸まっている。吻は短く、耳が短いのも特徴の一つである。又周囲の環境に溶け込みやすいよう、夏と冬で毛色が変化した。

### ■分類

日本狼はエド狼（北海道に住んでいた）と似ているが別亜種である。



日本狼は大陸のハイイロ狼と分岐したのは日本列島が大陸と別れた十七万年前とされているが、種として分岐するほどの差異が見られないことから、同種の別亜種との説がある。

### ■絶滅の原因

日本狼の絶滅の原因は確定していないが、おおむね狂犬病やジステンパーなど家畜伝染病と人為的な駆除、開発による餌資源の減少や生息地の分断などの要因が複合したものであると考えられている。

なお、一八九二年（明治二十五年）の六月迄、上野動物園で日本狼を飼育していたという記録があるが写真は残されていない。

当時は、その後十年程で絶滅するとは考えられていなかった。

### ■生存の可能性

一九〇五年（明治三十八年）以降にも各地で日本狼の姿を見た、遠吠えを聞いたといった事例が多数あり、現在でも生存している可能性が高いとして調査を行っている個人や団体も存在する。

紀伊半島山間部では、一九七〇年代に捕獲された動物が日本狼ではないかと騒動になった事例が複数あった。現在でも、紀伊半島山間部では日本狼が生存しているのではないかとこの噂は絶えない。現在でも同半島では日本狼の目撃証言を募るポスターがしばしば目にされる。

秩父山系でも、一九九六年に日本狼に酷似した動物が撮影されたことがあり、日本狼生存の噂は絶えない。

また九州中部の山地でも二〇〇〇年に秩父と同様の事例があり、生存しているのではないかとい

う話もある。

### ■日本狼絶滅の弊害と狼の導入計画

日本狼が絶滅したことにより、天敵がいなくなつた猪、日本鹿、日本狼等の野生動物が大繁殖することとなり、人間や農作物に留まらず、森林や生態系にまで大きな被害を与えるようになった。アメリカでは絶滅した狼を復活させたことにより、崩れた生態系を修復した実例があり、それと同様にシベリア狼を日本に再導入し対応するという計画が立案されたこともあつた。しかしながら、日本狼より大型で体力の強いシベリア狼が野生化することの弊害が指摘されて中止になつた経緯がある。現在も、祖先が日本狼と同じという説がある中国の大興安嶺の狼を日本に連れてきて森林地帯に放すという計画を主張する人々がいる。

また、近年では、クローン技術により日本狼を復元しようという話も持ち上がっている。

### ■豺やまいぬ(山犬)

豺とは中国の古字である。日本では古来から、山犬と狼と呼ばれるイヌ科の野生動物がいるとされていて、説話や絵画などに登場している。これらは同じものとされるがあつたが、江戸時代ごろから、別であると明記された文献も現れた。山犬は小さく狼は大きい、狼は信仰の対象となつたが山犬はならなかつた、などの違いがあつた。このことについてはいくつかの説がある。

- (1) 山犬と狼は同種(同亜種)である。
- (2) 山犬と狼は別種(別亜種)である。
- (3) 日本狼は山犬であり、狼は日本狼と家犬の雑種である。

(4) 日本狼は山犬であり、狼は想像上の動物である。

又、現在では山犬が絶滅してしまうと、本来の意味が忘れられ、主に野犬を指す呼称として使用されるようになった。

以上が文献による記述であるが、読んでみると山犬と狼は一緒なのか、別なものか又、絶滅したのか未だ生存の可能性があるのか何とも判断できない。私が少年時代に見た山犬(らしきもの)や、大台ヶ原での遠吠の話もクエスチョンマークである。

#### ■山窩と山犬

昔、山地を渡り歩き、山奥や河原で仮の住居を造り、狩猟や漁獵、竹細工を生業とする山窩という種族があった。奥地を点々と移動しながら、竹細工の籠かごや箕みを作り山里の農家で米、麦などの穀物と交換し、又野山の山菜、木の実、又狩りで得た獲物などで生活をしていた。

又、言語も山窩特有の言葉を話し、一般人との話もむづかしかつたと伝えられている。

しかし明治政府が樹立してから、山窩の生活が禁止され、一定の場所で居住するよう定められたそうである。

そして、その時に狩猟用に飼われていた犬が不要となつて山地に放置され、それが野犬となつて狼や山犬と交尾し、多数の「山の犬」をつくり出したのではないかと想像できる。

そのため、山犬という一口の総稱であつても、色々な事情で幅の広い系統のものがあるのではないかと考えられる。

#### (四) 久馬造と犬くまぞう

紀伊半島の中部から西方にかけて広々とした紀伊山地があり、奈良県北部から三重、和歌山の県境にまたがる大峰山脈には、弥山（一、八九五米）八剣山（一、九一五米）佛生嶽（一、八〇五米）釈迦岳（一、八〇〇米）等十指余る高山が聳えている。

この山地には、昔から月の輪熊や狼や猪などの野獣が住んでおり、未だ前人未踏の地域もあった。又、和泉、大和、紀伊の山々を瀬降りして渡り歩く山窩が放ち飼いで犬が野性化し、狼と交尾してできた山犬も生息し、草食動物である鹿、兎、栗鼠などを捕らえ生存していた。

特に狼や山犬は吉野、熊野、紀伊の山地に出没し、時には奥深い山里に住む農家に現れ、鶏など家畜を襲うこともあった。

狼は前記のように、明治の中頃に絶滅したと伝えられていたが、紀伊山地の奥地には、未だ狼が生きているということが信じられていた。

この地に住む住人たちは、鹿や兎が噛み殺された死骸を見たり、冬期には山上での遠吠えの声を聞いたという噂は後を絶たない。

大峰山脈の中程に位置する八剣山の中腹に、小屋を建て狩りをする猟師がいた。彼は以前にも此処にきて飼犬の「熊」と共に鹿狩りをしたことがあるが、今回の山小屋暮らしは、地元の噂通り狼や山犬が果たして生存しているのか如何か確かめるのが目的であった。

昭和十年十二月の下旬、紀南地方に珍しい大雪があり、紀伊山地は前日から降り積もった雪が二

尺（約六十糎）を越す積雪があつた。

この日、獵師は一週間の山籠もりで略希望通りの目的が叶えられたことと、持参した食糧が乏しくなつたことから下山することを決めていた。

その日の朝、足には古い軍靴をはき、体は上下の綿入れを纏い、左手に銃を右手に鎌を持つて行手を阻む熊笹や雑木を払い除け、勢いよく山を降りる男、獵師の久馬造である。

八剣山から久馬造の住む花園村の池ノ窪迄は約八里（三十二糎）の道程があるので、この雪道では途中一泊の野宿を己むを得ない。

もう雪は止み、雲間から薄日が差していたが、そろそろ夕暮れが近づくと頃だ。朝早く山小屋を出た久馬造は足腰に疲れを感じ、空腹を覚えていた。何処かでひと休みして罫を探さねばと思ひ、足を止め辺りを見廻すと前方に大きな松の木があり、根元が平地で雪が少なそうな場所があつた。久馬造は満足気に肩から荷物を卸ろし雪のない草地に置いた。

腰に差していた鎌を取り出し、松の木の下の周辺の笹や草を刈り取り、根もとに敷いた。

此処は南受けの方角で、北西が小高い土手になっているので、風当たりが少ないので、ある程度の寒さは防げる。台地の雪を払い除け、刈り取りた笹と歯朶の葉を敷き、一夜の罫を用意した。

そのあと、寒さを防ぐため、焚火の用意をしなければならぬ。明るいうちにと思ひ、少し離れた谷間に向つた。谷間には杉の木が生え繁り、下には枯れ枝や枯れ葉が一杯落ちてゐる。拾ひ集めた両腕で抱え込んで二往復すると一杯になつた。

罫の前に枯れ枝と枯れ葉を積み重ね、持参した袋から燐寸を取り出した。用意していた油を染ま

せたボロ布を枯れ葉の下に入れ、火を付けようとしたが、燐寸は湿っていて仲々火が出ない。何回かやっているうち漸く発火した。ボロ布に火がつくと忽ち杉葉に燃え移り、パチパチと音をたて白い煙を上げながら燃え上がっていった。

両手をかざし、全身に火を受けると、冷え切った身体が徐々に暖かくなっていく。暫く燃え盛った火が置火を残して下火となる。久馬造は袋から栗餅を二つ取り出し、置火の中に放り込んだ。朝粥を少し食べたばかりで腹が減っている。腹の虫が泣きだした。頃合いをみて置火から餅を取り出し、「ふー」と息を吹きかけながら噛りついた。少し焦げた餅はいい臭いがする。大き目の餅を二つ食べると空腹感が満たされていった。腹がくちくちくなると眠気がさしてくる。

寝る前にもう一度置火の上に枯木を載せ、残り火をかき立てた。火は瞬く間に燃え上がり、身体全体に温もりを感じる。久馬造は今のうちに寝ておこうと思ひ、火のそばに身体を横たえた。疲れが出て、暫くうつらうつらと眠っていると、突然「バサー」と大きな音がして目を覚ました。何事かと思ひ、起き上がってみると、置火の火が消えている。上に雪が被かぶさり火の気がない。上を見上げると、上空の松の枝が見える。「そうだ」と気が付いた。下の焚火の熱で、上空に張った松の枝の雪が溶け落ちたのだ。「仕方がない」と思ひあきらめ、再び羊歯の上に寝てみたが寒くて眠れない。少しうとうとしているうちに朝がきた。素早く起き上がり、身支度を整え出発の用意をした。朝飯は抜きだ、餅はまだあるがもう焚火をしておれない。袋から鹿の干肉を取り出し噛みしめながら歩きだした。

今日は冬の空に珍しく、良く晴れている。少し進むと谷川がある。十津川の枝川だ。この谷川は

久馬造が子供のときから馴れ親しんでいる。山魚やまめなど川魚をとったり、夏に川遊びをするのによく来た処だ。道はないが通り抜ける場所を知っている。この川筋を下つていくと、池ノ窪の我が家へたどり着くのが早い。

昼すぎに家に帰り着くことができた。雪道は既に踏み固められていた。

家には嫁のお崎がいて、久馬造を黙つて出迎え、その儘何も言わず、かまどに柴を放り込み、湯を沸かし始めた。湯が沸くと久馬造は残り飯を茶碗に入れ、湯をかけ、二、三杯かき込んだ。

腹を満たすと急に眠気が差してきた。その儘囲炉裏のそばにごろりと横になり、疲れてぼんやりとした頭の中に、死んでしまった父母や弟のこと、子供の頃牛に襲われ恐かったこと、熊と野山を駆け巡ったことなどが頭に浮かんできて。そして偏屈な自分の人生も、この山暮らして最後になるだろうと考えていた。

久馬造の生家は花園村、池ノ窪の在所で、代々農業を営んでいた。父は檜ひノ原寅楠はらたけす、母は靖乃やすのと言ひ、家には寅楠の母、辰子たつこと、寅楠達の子供三人を合わせて六人が暮らしている。

父寅楠は、若死した祖父安次郎の後を継ぎ、母と共に約一丁歩（二ヘクタール）の田畑を耕し、部落では大地主で安定した生活をしていた。

子供は長男久馬造と、次男の秀一ひでいち、長女のお照てるがいて、もう一人次女の秋子が生まれたが、生後間もなく病死していた。風邪から肺炎を起こしたのである。

久馬造は明治十四年三月に生まれ、次男秀一は翌年の六月に生まれた年子で、妹のお照はそのあと四年後に生まれた。



働きの父と母は、子供を祖母の辰子に預け、毎日田畑に出て働いていた。久馬造は四歳になったとき、母に連れられ田圃たんぼに着いて行つた。六月の田植前の時期で、父は田を耕し、母は上の畑で菜種殻を集め、片付けていた。久馬造は田の畦に咲くたんぼの花を摘み遊んでいた。父は唐鋤からすきに牛を繋ぎ田を鋤き始めた。牛は先代から受け継いだ大牛で力が強く、農耕に馴れていて手綱を操るまでもなく真つ直ぐ進んでいく。

田鋤きの仕事が順調に捗つていたとき、突然牛が暴れだし横に走りだした。上の畑で母が菜種殻を積み上げ、火を付けて燃やし始めたところ、よく乾いていた殻が一気に燃え上がり焰があがつたため、牛は驚いて騒ぎだしたのである。

牛が急に飛び出したため唐鋤は寅楠の手から離れ、横倒しになつたまま引き摺られていき、田の畦せきに向つて走つてきた。

突然のことに久馬造は逃げ場を失い、立ち止まつたところに唐鋤が飛んできて、久馬造の足に当たつた。久馬造は転倒して悲鳴を上げる。びっくりした母は上の畑から飛んで降り、久馬造を抱きあげ足下をみると左足首から血が滲んでゐる。父は急いで土手際に牛を追いつめ、立ち止まつたところを唐鋤を取りはずし、牛を近くの柿の木に繋いだ。

父はすぐ母の側に寄つてきて久馬造の足を見て、「痛いかー」と足に触れた。「痛いよー」と久馬造は声をあげて泣きだした。

父母は一旦仕事を止め、二人で久馬造を家に連れて帰り、急いで布団を敷いて寝かし付けた。

二人は久馬造の左足を見ると、足首のところが紫色に腫れ上つてゐるが出血は殆ど無い。母は急

いで小麦粉と酢で練つて布に延ばし、足首に貼り付け油紙で包んだ。打撲の熱取りである。

痛みは少し柔やわらんだのか、啜すずり泣いていた久馬造は泣き止んだ。父は「大したことないやろ、一晩様子をみるか」と母に言った。

医者に連れていこうにも此処ここから北寺きたでらの在所迄遠い。又外科の骨接ぎは高野迄行かねばならない。忙しい折だし金もかかる。

昼前に近所に遊びに行つていた三才になる弟の秀一と祖母が戻つてきて「どうしたんや」と声を掛けてきた。

父母は久馬造の守りを祖母に頼み、一旦田畑に引き返しやり残した仕事を片付けに掛かった。

夜になって母の靖乃は久馬造に添寝をした。安心したのか久馬造はよく眠つた。元々我慢強い子供だった。

翌朝、父と祖母がやつてきて怪我の様子を見に来た。母は久馬造の左足首に巻いていた塗り薬をそーつとはがした。小麦粉は乾いてボサボサになつている。熱を吸い取つたのか腫れは大分引いていた。父はそれを見て「氣使えないな」と言つて祖母と顔を見合わせた。

怪我から一週間経つてから母は久馬造を起こし、手を引いて歩かせてみた。少し左足を引きずるが歩けそうだ。「痛いかい？」と問う母に「あんまり痛くないけどちよつと歩きぬくい」と久馬造は答えた。

結局、医者には連れて行かず、久馬造は家で治るのを待つたのだが完全に治癒したのではなかつた。歩くとき左の足先が開き軽い跛びつこを引いた。

それから三年が経ち、久馬造は小学校に入学することになった。

新子あらこにある分校に通うのだが、池ノ窪の家から分校迄、半里（二籽）程離れている。最初の一週間は母が着いて行つて呉れた、そして帰りには近所の娘、菊子と二人で帰るように言い聞かされていた。

菊子は坂下さかしたとよた豊太とお房おきの娘で一人子である。菊子の家は貧しい小作農で、父母はいつも日傭働きに出ていたので、小さいときから家で留守番をしていた。その為かいじけた性格で無口だった。それでも気の強いところがあつたので母はそう考えたのだろう。

分校の学年は一年生から四年生迄で、十八人の生徒がいた。五年生になると北寺の本校に通うことになる。

一緒に入学した生徒は、久馬造と菊子の他に三人の男の子がいたが、女の子は菊子ひとりだけだった。二年生から四年生まで女の子が多いのに、一年生は何故か少なかった。

三人の男の子は、何れも新子の部落で仲良しだった。池ノ窪から通う久馬造と菊子は、いつも除け者にされ苛められた。特に久馬造には「ちんば、ちんば」と言つて馬鹿にした。ちんばとは跛の方言である。

それでも久馬造も菊子も、根が気の強い方だったので、別に恐れることなく四年間無事に通学した。

久馬造たちが二年生になったとき、弟の秀一が一年生に入学してきた。池ノ窪から三人と他の部落から四人で人数が多かった。秀一は元気がよく口が廻り、頭も良かったので、友達がすぐできた。

しかし、兄の久馬造とは一緒に通学していても、兄弟同志で遊ぶことは少なかった。

四年生になつて分校を卒業すると、久馬造はもう本校に行かないと言つた。父母も久馬造の学校での生活を知っていたので、無理に進学を勧めなかつた。菊子も同様に四年で学校を止め、家におることになった。何処かの子守りに備われるとの話だつた。

十一才になつた久馬造は、暫く家にいて農業を手伝つていたが、百姓仕事は向かず馴染まなかつた。十四才になつたとき世話する人がいて、新宮の米屋で働くことになつた。

丁度、弟の秀一は今年の三月に本校の六年生を卒業し、家で農業をすることになつた。

学校の先生は「秀一は頭が良いから、和歌山の中学校に進学させへんか」と言つてきたが秀一は断つた。最近、父の寅楠は体調を崩していた。父は未だ四十二才だが、若いうちの激しい農作業と酒の飲みすぎが崇つて肝臓を悪くしていた。

先代の安次郎と同じ道を辿つたのだ。安次郎も深酒のため若死していたのだ。それを知つていた妻の靖乃は常々、酒を控えるよう寅楠に言つていたのだが聞かなかつた。

生活に余裕があつて金を貯めても、何の楽しみもない田舎暮らしは、酒だけが心の慰めとなつていたのでらう。

そうした事情から話は決まり、久馬造は出稼ぎに、弟の秀一は父の農業を手伝うことになつた。

久馬造の勤め先の新宮の米屋は、主人夫婦に子供がなく、跡継ぎの無い状態だつたので、寅楠夫婦は息子の行先を考え、或いは養子に出しても良いと腹の内であつたのかも知れない。

歳月は流れ、明治三十五年の春、秀一は二十才になつた。これ迄秀一は父を助け、家の中心となつ

て農業に精をだしてきた。近々嫁を迎え家を継ぐ予定だった。相手は同じ農家である新子の田ノ上晴夫の娘、お崎である。

お崎は二才年下の明治十七年生れであるが、二人は小学校時代からの顔見知りであった。親同士も知り合いで親交があつたので縁談は難なくまとまつた。そしてお崎は己に妊娠していた。去年の夏祭りの夜、二人はこっそり祭の場を離れ、逢い引きして結ばれたのである。

然し、ここで問題が起きた。今年、四月の徴兵検査で秀一は甲種合格となり、兵役に就くことになったのだ。

当時は戸主又は長男は兵役を免れる規則になっていたが、檜ノ原家の戸籍では長男は久馬造で、秀一は次男の儘になっていた。そのため、秀一は軍役を逃れることはできなかつた。

秀一は、一ヶ年の軍隊教育を受けた後、日露戦争の戦場に赴き、運悪く乃木將軍の麾下、旅順攻撃に参加し、激戦の地に向つた。難攻不落の旅順港、二百三高地は、攻めるに難く守りには弱い戦場だった。ロシア軍は要塞から打ち放す大砲と既に装備されていた機関銃で応戦し、日本軍は二十二年式連発銃と十三年式又は十八年式の単発村田銃のみで、銃撃戦に於いては、彼我の差は歴然として我が軍は劣っていた。

然し、日本の大本営では現状の把握はできておらず、旅順港の陥落を待ち侘び、「乃木は何しとんのかー」という大山元師の声もあつた。

これに応えて、乃木將軍は数多の戦死者をだしながらも攻撃の手を弛めず、多数の兵士を動員して激戦に次ぐ激戦を繰り返し、遂に二百三高地に日の丸の旗を掲げた。明治三十七年十二月四日の

日である。

その後、旅順港要塞は日本軍の攻撃により、相續いて陥落し、翌年一月一日、終いにロシア軍司令官ステッセル中将は降伏を決意した。

翌、一月二日旅順水師營に於いて、乃木將軍と敵將ステッセル將軍の会見は有名である。

然しながら、この日露の戦役に於いて多くの血潮を流し、兵士の戦死者を出したのである。

そして哀れにも、花園村出身の兵士、檜ノ原秀一の名も戦死者の中に含まれていた。

明治三十八年の四月、桜吹雪の散るなか、秀一の遺骨は故郷の地、池ノ窪の我が家に帰つて来た。訃報は知らされていた両親や親族、それに花園村長を始め村役場の職員、村の人々は深く頭を垂れ、これを出迎えた。

そしてその中に、長男久馬造の姿もあつた。

久馬造は新宮の米屋で働いていたが、弟秀一が戦死したこと、それに米屋の主人、野迫留吉のせとめきちとその妻千栄子ちえこの家庭の事情もあつて帰つて来ていた。

野迫の米屋は小規模ながら、代々続く老舗だったが、久馬造が奉公にきた時代には未だ精米機は普及しておらず、足踏みの杵臼きねうすで、人力による精米であつた。精米とは玄米を精白して白米にすることである。

久馬造は左足先が少し曲がつていたが、足腰は丈夫で、一日二斗（三十軒）の精米を熟こなしていた。良く働くので主人の留吉に気に入られ、後継ぎのない野迫家では、一時養子との考えがあつたが、その後様子が變つてきた。

最近、新宮の大手の米屋では、発動機精米機が導入され、精米能率が向上したため、安い値段で白米が購入できるようになった。このことにより、留吉夫婦は近々米屋を止め店を畳み、行く末は妻の千栄子の弟に当たる平林喜平の娘、お近にみてもらう算段をしていた。

お近は出戻りで今は実家に帰らず、新宮の飲み屋で働いていた。

又、久馬造は働き者であつたが、近年酒を好むようになり、毎月の休日、一日と十五日には新宮の街を飲み歩き、泥酔するようになったのも原因の一つである。

こうして久馬造は奉公先の都合と、弟秀一の戦死が重なって、今年の春から実家に戻つていった。家には父の寅楠と靖乃、それに戦死した弟の嫁お崎、子供の為吉の四人が暮らしていた。祖母の辰子はとうに亡くなつており、妹のお照は秀一が戦死した前年の春、同村北寺で雑貨店を営む西浦栄一の長男、隆市に嫁いでいた。今は一児の母となつてゐる。

母は健在であつたが、父は肝臓を悪いしていたため痩せていた。二人の働き手が無くなつたので一丁歩あつた田畑も今では殆ど小作に出し、残り僅かな田畑を母とお崎が守つていた。

百姓仕事の苦手は久馬造は、妹お照の嫁ぎ先の西浦雑貨店の仕事を手伝い、妹婿の隆市と気が合ひ、二人は仲が良かった。店主の栄一も、無口でよく働く久馬造に好感を持つていたので、久馬造は実家より居心地の良い西浦で過すことが多かった。

父母は、久馬造は二十五歳になるのに独身であることを気使い、今は独り身になつたお崎と夫婦になることを望んでいた。父と相談の上、母の靖乃はそのことを、そつとお崎の意向を聞いてみたが、「実家の父母に相談してみる」といつて返事を渡した。

少し日にちを置いてから、お崎は新子の実家へ帰り、久馬造との縁談について父母に話した。父母は兼ねてからそのことを気に掛けていたので、母は「お崎、お前は久馬造さんのことを如何思てんのや」と胸の内を聞いてみた。お崎は少し考えてから「久馬兄さんは人がいいけど、無口で子供の為吉ためきちとあんまり話をせえへんので気がかりや、それに百姓仕事ができるので先が心配や」と思っていたことを話した。

然し父母は、家に未だお崎の妹で婚期の近いみち子や、弟、よのすけ与之助がいることから、お崎が出戻ってくることは反対であった。

一晚話し合った末、お崎もそのことを充分理解できたので結局、久馬造との結婚に同意した。

日を改めて、檜ノ原家と田ノ上家の戸主同志が話し合い、二人の結婚話は決着した。

そして久馬造、お崎の婚儀は簡素ながら執り行なわれ、二人は夫婦となり、子供の為吉も久馬造の長男となることになった。

久馬造達が結婚した六月中旬、田植前の農繁期となつて人手の足りない檜ノ原家では、お崎の実家の弟与之助に農耕を手伝ってもらっていた。父の寅楠は身体は弱つていたので家に居て、久馬造と共に田植用具の準備をしていた。

母の靖乃は田に出て働いていたが、前夜から腹痛を覚えていた。忙しい最中なので痛さを我慢して誰にも話していなかったが、夕方になると辛抱しきれず、嫁のお崎に断つて家に帰り床に就いた。翌朝になつても痛みが治まらず、我慢ができなくなり、久馬造に医者を呼んでもらうことにした。

久馬造は母の看病を父に頼んで急いで北寺の田原医院たはらに駆けつけた。



昼前、医者の田原茂造がやってきました。茂造は六十前で足が遅い。家に着くなり、座敷に上り込み、母を診た。茂造は靖乃のお腹を触り「何時から痛いんや」と聞く。母は二日前の晩から痛みだし、苦しかったので先生に来てもらったと言うと、「ほんぞ悪い物食たのと違うか、半日程絶食して腹いたが治まったらお粥でも食うたらええ、今日は痛み止めの薬渡すさけ、後で取りに来てくれ、(痛みが)止まらなんだら又来る」と言つて茂造は帰った。日が暮れて嫁のお崎が戻り、与之助は新子の家へと帰つて行つた。

久馬造が医者から持歸つた薬を飲み、少し落ちていて暫く眠つていたようだが、夜中になつてから再び痛みだし、苦しみました。そばで寝ていたお崎が驚いて寅楠と久馬造を呼んだが、どうすることもできず、朝がくるのを待つしかなかつた。

朝一番に久馬造は家を飛びだし、北寺の医者の許に走つた。出がけに父は「死ぬ程苦しんでるさけ、直ぐに来てもらえ」と叫んだ。

小一里(約三軒)程ある道を、小走りに急いで駆けつけたが、田原医院は戸を閉ざし未だ寝ていた。久馬造は構わず大声をだして「母さんが死ぬ、早よ来てくれ」と叫んだ。入口の近くに寝ていた女中のお朝あさが驚いて急いで門を開け、久馬造を家内に入れた。医者の茂造も聞こえていたのか起きてきて往診の準備をした。

檜ノ原家は村でも名の通つた旧家で、家主の寅楠も常客であるので田原医院でも氣を使つていた。父の茂造よりも息子の仙一せんいちの方が「よく診る」との評判だったので、今日は二人で往診することになった。

診察の結末は深刻であった。息子の仙一の診たてによると、盲腸炎から腹膜炎を起こし、腹部に化膿が拡がっていて手当ての方法がなく、手遅れであった。

あとは腹部を冷やすしかなく、これも化膿の進行を少し遅らせるだけの手当てにすぎなかった。こうして靖乃は苦しんだ挙げ句、終いに帰らぬ人となった。発病から一ヶ月足らずの短い日であった。丁度この頃、農繁期の田植の最中だった。呆然とする檜ノ原家の人々に対して、部落の人は放っておかなかつた。新子の田ノ上親子が中心になり、総ての農作業を無事に終らせることができた。

夏がすぎ、秋風が吹きはじめた九月下旬、父の寅楠は急死した。前日迄異状を訴えていなかった。夏がすぎ、秋風が吹きはじめた九月下旬、父の寅楠は急死した。前日迄異状を訴えていなかった。寝間をあげ、声を掛けたが返事が無い。不思議に思い側に寄つていき、再び声を掛けたが反応がなかった。驚いたお崎は急いで久馬造を呼んで二人で寅楠の身体を確かめたところ、既に息絶えていた。

壮年の頃、よく働き体も丈夫だった寅楠は、過労と飲酒のため体が弱つていた折に、息子秀一を失い、そしてそのあと三年後に頼りにしていた愛妻にも先立たれ、生きる望を失つたのだろうか。田原の茂造医師から止められていた酒を飲み始めたため、持病の肝炎が急に悪化して命を縮めてしまったのだろう。

九月の末に葬儀が行なわれた。村の旧家で多くの小作人を抱えた檜ノ原家当主の葬儀は盛大で、部落の見送人が集まりその死を悼んだ。

寅楠は享年五十四才の年齢であった。

同年九月初め、檜ノ原家親族一同が集まった。お崎の実家の父、晴夫と長男与之助、亡き寅楠の

龍神村に嫁いでいた豊七五と房江みさえ、西浦店に嫁いだお照の義父栄一とその長男隆市などであった。

豊と房江は、姪に当たるお照の娘で四歳になった清子きよこを初めて見て「可愛い、可愛い」と言つて頭をなでた。清子はいとこの為吉と遊んでいた。

話し合いは順調に進み、一町歩ある田畑の八割は小作に出し、残りの田畑をお崎が与之助に手伝つてもらつて作る事になった。又、久馬造は今迄通り西浦店を手伝いながら檜ノ原家と当主になることが決まつた。

生活面では、広い屋敷ではあるが、年貢の米を納める蔵が必要であるのでこの儘、今の家で暮らすことにした。

西浦雜貨店は手広く商品を扱うようになったが、近頃店主の栄一は獵銃に興味を持ちはじめ、大阪から三丁の銃を仕入れた。陸軍の小銃、十三年式と十八年式村田銃の拂下げを獵銃に改造した単発元込の銃で、今まで花園村周辺で使用していた火繩銃の獵銃と異なり、装備と威力に大きな差があつた。

栄一は息子の隆市と久馬造に銃を貸し与え、暇があれば近くの野山で狩りをした。獲物は主に野兎と野鳥、時には猪や鹿を狙うこともあつた。これに伴い、獵犬として和泉から紀州犬を取り寄せ、獵にでるとき連れて行つたが、獲物を追うのが下手で、あまり役に立たなかつた。

平穩な秋が流れ、明治の時代が過ぎ、大正十二年の春を迎えた。

久馬造の家では、長男為吉は十九歳になつたが、生まれつき體質が弱く、百姓仕事には向いていなかつたので、母のお崎は心配して実家の父に相談した。それで父の春夫は伝手つてを頼んで、その口

聞きで村役場の雑用係（小使い）として傭われることになった。

その頃、西浦雜貨店でも様変わりがあった。隆市の長男富夫が十八歳となり、和歌山市の中学校を卒業してきて店で働くことになった。

又、二十歳になった姉の清子は世話する人があつて、龍神の材木商の家に嫁ぐことが決まっていた。西浦家では、店主夫婦は健在であり、長男隆市の父子を加えて働き手が多くなり、久馬造にとつては自分が余分な存在であると思いはじめた。

店主をはじめ隆市等は久馬造を除けることなく気を使つていたが、やはり本人としては居辛くなつて屢々店を休むようになつた。

久馬造は店でも我が家でも居場所がなくなり、銃を持つて野山に出歩くようになった。店で飼つていた紀州犬の「熊」は店主から貰つた子犬で久馬造にとつて唯一の友であつた。久馬造は自分の名に因んで犬の名を「熊」と名付け伴れ歩いた。熊は人馴れのしない犬だったが、久馬造だけはよくなつた。熊は無口で偏屈な久馬造と相通するものがあつたのだろう。

やがて久馬造は西浦雜貨店を辞めることにした。店の栄一も隆市も一応反対はしたが、既にその氣になつてゐる久馬造を強く引き止めることはしなかつた。

久馬造は貰ひ受けていた犬の熊と更に獵銃一丁をもらい家に歸つた。

事前にそのことを妻のお崎に話していたので歸つても何も言わなかつた。只、妻とは別に仲が悪いわけではないが、無口で取つ着きの悪い久馬造を持て余し夫婦仲は冷えていた。

長男の為吉も、実の父ではないということや無口の久馬造を敬遠し親しく近付いてくることはな

かった。

生活にとつては、檜ノ原家は小作の農家から年貢の米が全て入ってくるので暮らしに困ることなく余裕があつた。久馬造は西浦店の栄一に頼み込んで新しく猟銃を買い入れた。やはり陸軍拂下げの村田銃で二十二年式連発銃の口径十一耗、実包と散弾銃を共に使用でき、重量も一貫二百匁（約四、一籽瓦）と軽い装備も威力も猟には持つてこいの銃であつた。

久馬造は生まれて始めて始めて本来の自分を取り戻し、心の平穩と自由を感じるようになった。

店を辞めてから酒を殆ど飲まず、左足は少し曲がつてはいるが足腰は丈夫で体力があり、力も強かつた。今は誰に煩わされることもなく、気心の通じる愛犬の熊を伴って野山で狩りをするのが久馬造の最大の喜びであつた。

狩りには自信を得た久馬造は、近隣の野山で山鳥や兎などの小物では飽き足らず、又威力のある連発銃を手に入れてから、大物の鹿や猪を撃つてみたいという欲がでてきた。

在所の池の窪から二里（八籽米）程東に荒神岳がある。標高千二百六十米の高い山で、麓は落葉樹の雑木が生え、山裾の谷川添いには北股きたまたという小さな部落がある。

或る日、久馬造は荒神岳を目ざし山を登つて行つた。猪や鹿を目当に探していた。しかし、猪は夜行性で昼間は叢くさむらに隠れて寝ているので見付けることはむづかしい。その点、猟犬があると臭いを嗅ぎつけ、猪を追い出してくるのだが、熊では当てにならない。

山の中腹近くまで登つて行つたとき、突然「ワン、ワン」と犬の鳴き声が聞こえ、続いて「ドーン」という銃声が出た。

久馬造は驚いて熊を伴れ、音がした方角に進んでいくと、向いの山際に銃を持った男と犬がいた。熊は近付いて「ウー」と唸り声をだしたが、久馬造は気にも止めず、更に近付いてみると、男の前に猪が倒れていた。男が撃ち殺したのだろう。

男は近付いてきた久馬造を見廻しながら、「お前、だれや」、「何処からきたんや」と問いかけてきた。久馬造は相手を見た、五十位の背の低い男である。「農か。わしは池ノ窪の檜ノ原や」と答えると「おゝ、寅楠さんとの息子はんか」と言いながら久馬造の持つてゐる銃を見て「ええ鉄砲やな…一遍見せて呉れ」と言つたあと、「こんな鉄砲はいくらしたんや」と問いかけてきた。

久馬造はこの春、西浦雜貨店を止めるとき店主から単発の猟銃をもらったこと、又そのあと連発の銃を買い求めたが値段が十二円であつたことなどを話した。

男は「そうか、十二円やつたら米一俵（六十籽瓦）と同んなじ値やな。農等にはとてもよう買わん」と言つた。

男は長谷米造はせよねぞうと名乗り、北股の住人で百姓の傍ら猟をして生活しているらしい。久馬造は以前聞いた話ではこの部落の住人は、昔の落ち武者の集まりで発見されたのは明治に入つてからだと聞いていた。

農地は狭く、段々に耕した山畑と麓に沼地が少しあるだけで戸数も僅か十二軒であつた。

この谷間で住人達は山畑で麦や粟の穀類と芋や野菜などを、米は麓の沼地で作つて暮らしているとのことであつた。

米造の話によると十二軒ある家の内、九軒迄長谷姓を名乗り何れも親戚同志で、他の三軒は別姓

であるらしい。

暫く話し合ったあと米造は「猪肉をやるさけ家へ寄って行かんか」と言ってきた。久馬造はこれに応じて彼の家に行くことにした。

米造は腰に巻いた細引き縄を取り出し、猪の両足を括り付け、腰を屈めて背中に担いで歩きだした。小男だが力は強い。久馬造は米造の銃を持ち後に従った。犬達は最初は相手を警戒していたが、飼主たちが仲良く話したのでお互い気を許したのかおとなしくなっていた。

山道を歩いていくと、米造の家があった。米造は家の裏手に廻り、石を積んだ井戸のそばに猪を降ろし、表に戻ってから戸口を開け、「オイ」と声を掛けた。すると薄暗い奥の方から人が出てきた。老婆のように老けた女だ。米造は小声で何か話をする女は、久馬造に向かい「よう、おこし」と挨拶をした。

二人は表の小屋の入口に犬を繋ぎ家の中に入った。目が馴れてくると久馬造は家の中を見渡した。居間は板の間で奥の方に畳が敷いてある。広い土間には竈があり、その周辺には板がたてかけていて、獣の皮が張つてある。

大半は野兎で、狸か狐の皮もあるようだ。米造の話では獲物はすべて皮を剥がし鞣してから金に換えるそうだ。

米造は久馬造を裏手に連れ出し、猪を捌きにかかった。嫁はお竹と言う名前らしいが何時の間に居なくなつた。近所の家へ猪が獲れたことを報せに行つたのだ。

米造は山刀を器用にこなし、猪の皮を剥ぎ肉を叩き切っていると、間のなく話し声が聞えて五人

の男達がやつてきた。男等は久馬造を見て気兼ねをしていたが、米造の紹介で安心したようだ、頭を下げ挨拶をした。檜ノ原当主の名前は知っていたのだろう。

男達は分け前の猪肉を持ってそれぞれの家に配り歩くのだ。

剥いだ皮は、谷川の水で洗って乾かし、自家で作った菜種油を使って鞣し、何れ売り捌くのだろう。暫くして、嫁のお竹は帰ってきて夕飯の用意に掛かった。米造は久馬造に渡す土産の猪肉を竹の

皮に包み、井戸端の冷たい石の上に置いてから「折角来てもろたんや、今夜は泊まっていって呉れ、濁酒どぶろくで一杯やりもて先の鉄砲の話聞きたいんや。」

久馬造は乞われるままに一晚泊まることになった。犬達は猪はらわたの腸をもらい満足していた。

囲炉裏に網を載せて肉を焼き、お竹は飯と味噌汁を用意した。

久馬造は久し振りの酒にほろ酔い気分話を聞いていた。

米造は、親父から譲り受けた火縄銃を使っているが、雨が降ると火縄は湿って使いものにならないので、単発の安い村田銃を世話してもらえないかと問いかけてきた。久馬造はそれに答えて一遍、西浦店で聞いてみると言ったが、心中、前に店主からもらった古い銃をやってもよいと思っていた。米造の話し声を聞きながら、つい、うとうとと居眠りをはじめた久馬造は気になる話に目を覚ました。山に狼がいると言うのだ。晩秋から春にかけて、山上から遠吠えが聞こえ、山中で鹿や兎が喰い殺された跡があり、炭焼きの連中は狼の姿を見たという話を本気で語りだした。

この紀伊山地から続く大峰山脈には、弥山、八剣山、釈迦岳、七面山など二千米近い高山がそびえ、人里離れた山々には狼が住んでいるという噂け絶えない。然し、久馬造は狼は明治初年に姿を



消していると聞いていたので、米造の話には半信半疑だったが、あまり真剣な様子に、つい話に引き込まれ、或いは狼はまだ深山や高山に住んでいて時々、この地方にも表れるのではないかという思いが出はじめた。そしてそれは昔から言われている純粹な日本狼ではなく、恐らくそれ等の血を引いた山犬や野犬が、狼という姿で現われ人々の耳目に伝わっているのではないかとの思いもした。翌日、久馬造は家に帰ってきた。土産の猪肉をお崎に渡し、腐らないうちに近所へ分けてやるように言い付けた。

二、三日休んでから、久馬造は貰ってきた狸の鞆し皮を土産に西浦雜貨店へ顔を出した。店では栄一をはじめ、隆市夫婦は機嫌よく迎え、久馬造の姿を見て「すっかり獵師の顔形になったなあ!」と言った。

久馬造は近頃、荒神岳やその近くの北股の部落へ行き、其処で出会った米造のことや、出来事を話した。

そのあと、お照の出した昼飯を皆と一緒に食べ帰ることにした。帰り掛け注文しておいた弾薬と散弾の薬莖やっきょうを受け取った。米造にやる分を含めて多くの量を受け取り店を出た。

出口でお照は待つており「兄やん、山行きも良えけど危ないことせんといて、皆な心配してるんよ」と声を掛けてきた。

大正十二年十月、農家の取り入れが終った頃、久馬造は家を出た。二丁の獵銃と弾薬、それにお崎が用意して呉れた衣類と食糧を持ち、熊を連れての出発だ。今回は暫く野宿したり、米造の家に泊まったりして、当分家に帰らぬ心算だ。荷物が多いので、お崎が途中迄送って呉れて道半ばで別

れたが流石に荷物重い。

昼前に米造の家に着いた。待構えていた米造は、銃と弾薬をもらい嬉しそだった。

二日間泊めてもらい、近くの山をうろついたが獲物はない。三日目になって、久馬造は前から考えていたことを実行しようと呼動を始めた。荒神岳山麓から紀伊山地を抜け、八剣山（経ヶ岳とも言う、標高千九百十五米）に向うのである。この山には以前、月の輪熊が住んでいて麓に現われ、谷川の沢蟹さわがにを取っているのを見た人がいると聞いていた。熊が住む高山なれば鹿や、或は狼か山犬も住んでいても不思議ではない。一度そんな処で猟生活してみたかったのだ。

米造にその話をする。「そうか、僕も一緒に行く」、と言つて犬の「クロ」と共に着いて来た。

紀伊山地には、山鳥や兎がいるので、米造は銃に散弾を込めようとしたが、久馬造はそれを押しめた。十八年式村田銃は安全装置がないので暴発する恐れがある。

八剣山の中腹迄登り着いてから二人は、野宿の出来る場所を探した。辺りを見渡すと丁度南に面した崖の下に平地があり、風当りが少なく見通しも良さそうな場所があった。此処に山小屋を造り暫く住むことにした。米造は持参した山道具を取り出し、手頃な木を伐り、笹を刈り、羊歯ひざしと葛を取つて来て材料を集めた。木を組み、篠竹しのたけと羊歯を葛で編んで二日掛りで小屋を仕上げた。そして総ての仕事が終つたあと、米造は「クロ」を連れて帰つていった。久馬造と「熊」は残つた。

近頃、熊は度々久馬造から離れひとり歩きをするようになった。元々人馴れのしない犬だったが、久馬造にだけは懐なついていたのだが、山暮しが増えるにつれて、野性の本能が出てきたのか、別行動することが多くなつた。

米造が帰って行つた翌日、持参した食糧で腹を満たし、狩りに出た。今後の食い物を獲らねばならぬ。

山を少し降りた処で、鹿の姿を見掛けた。熊は唸り声をあげて駆けだして行く、久馬造は銃を向け、狙いを定めたが撃つことはできない。鹿は走り去つたが、熊は尚も追つて駆けていく。暫く待つていたが、熊は戻つてこない。山裾まで下り、先日米造が見付けた雉子の巢を見に行く。静かに近づいたが、氣付かれたか飛び立つた。羽根は綺麗だ、雄の雉子だ。久馬造は更に近付き、巢の方に向け銃を構えた。又鳥が飛出した、引き金を引いた、散弾銃である。飛び散つた弾は当り落下した。今度は牝の雉子である。雉子の産卵は春先であるので、今頃の牝は肉付きが良い。

久馬造は雉子の足を細引き縄で括り付け、肩に掛け、引き返そうと思ひ、口笛を吹いて熊を呼んでみた。暫く待つたが戻つてこない、仕方なく山を登りはじめ、途中、先日米造が仕掛けておいてくれた兎獲りの罟わなを見に行つた。獣道を辿りながら辺りを見廻すと、仕掛けた寅銃とらばさみに兎が掛かつていた。然し兎が無い、血の付いた寅銃に兎の足と、耳の着いた頭が残つていただけだ。何ものかが喰い散らしたのだろう、まさか熊ではあるまい。久馬造は不審と不安の気持ちで山小屋に引返した。雉子の羽根をむしり取り、骨付きで肉を捌いてから焚火をした。小屋の前に石で囲い、火が燃え拡がらないように造つた焼き場だ。今日は雉子肉があるし、米造が置いていつた鹿の干し肉と猪肉の塩漬がある。それにお崎が造つたボロ餅（雑穀を混ぜてついた餅）も米もある。食糧には心配はないが「熊」のことが氣に掛る。

小屋に入り、入口の戸を締めた。篠竹と笹と羊歯を編み込んだ開戸は風を防げる。

「熊」は未だ帰らないが寝ることにした。小屋の中は暗いが灯はつけない。家から百匁蠟燭と灯芯油しんゆを持って来ているが、必要以外は灯を付けない。近頃は髭も剃らず、風呂にも入れず汚れた儘だが気にもならず、すっかり山の住人になった。

翌朝起きて小屋を出てみると、熊はいた。別に尻尾も振らず鳴き声も出さず、久馬造の方を見てだけで踞うずくまっていた。

鍋に米と水を入れ、煮立ててから雉子肉と味噌を入れ、雑炊を炊き朝飯にする。熊にも椀に入れて餌をやった。その後、容器をもつて水汲みをする。すぐ近くに湧き水があるので水の心配はない。今日は昨日見た鹿の群れを探しに行く心算だ。銃を取りだし弾倉に弾を込めた。五発の連発銃で威力がある。今日は見付けたら逃すことはない。遠出するので合羽と毛布、それに食糧を袋に入れて背負い、小屋を出た。「熊」は黙つて着いてくる。昼すぎ迄山腹から麓まで歩き廻つたが鹿は見付からない。途中、草叢から山鳥は大きな音をたて羽搏いたが、散弾を込めていないで撃つことはできない。

不図気が付くと、熊の姿がない。又何処かへ雲隠れしたのだろうが、今はもういないほうがいい。無暗に鹿を追い立てられたら又逃してしまふ。そう思いながら久馬造はひと休みして、昼めしを食うことにした。

夕方近くなると山の暮れは早い。少し薄暗くなった頃、近くではさばさと音がした。久馬造は足を止め、辺りを窺うかがった。前方の木の陰に鹿がいる。二匹か、三匹か、一番近い鹿を狙つた、一瞬鹿はこちらを見た。引き金を引く、二発続けて発射した。音と共に他の鹿は逃げたが一匹は倒れてい

る。近寄って確かめる。角は生えているが未だ短い、若い牡鹿だ。

高ぶる気持を押え、鹿を引き摺って繁みの木の下へ運び込んだ。腰を降ろして坐り込み辺りを見廻してから、今夜はここで一夜を明かすことにした。火の用心のため、近頃煙草を吸わないが、今は気を落着かせるのに一服吸うことにした。

ひと休みしたところで、袋から合羽と毛布を取り出し、峙たぐらの用意をしてから、夕めしの支度をした。餅と鹿肉だが、火が焚けないのでその儘口にした。餅は固い。

少し音がしたと思うと熊が戻ってきた。鹿のそば迄きたが気にする様子もなく、蹠たつた。「熊」と声を掛け、干肉を放り投げるとゆつくり口に啣くはえた。近頃は犬らしい鳴き声を出したことはない。時おり低い声で「ウー」と唸るだけで飼い馴れていた久馬造には、何んとも気色が悪い。

久馬造は一応用心のため、鹿の足を縛り、立木の枝口に吊るした。熊は蹠たつた儘、「ジー」と見ている。

辺りが薄暗くなつたので、繁みの下の笹の上に合羽を敷き、毛布で身体を巻いて横になり、空を見上げると、昼間晴れていた空が、何時の間にか鉛色の雲に覆われ、冷たい風と共に粉雪が舞い始めた。

以前は熊と添寝をして暖をとることができたが、今はもう寄ってこない。体が疲れていたので暫く眠を閉じていると、知らぬ間に眠入ってしまった。

どれ程眠っていただろうか、不図何かの鳴き声が聞えた、耳を済ますと犬の鳴き声である、いや犬ではない、狼の遠吠えだ。

鳴き声は山に響いて、何処で鳴いているのか判らない。すると傍らで寝ていた熊が、「ガバツ」と飛び起き、山の頂上を目指し駆け登って行った。

暫く続いていた遠吠えが、ばたりと止んで静かになった。やはり米造が話した通り、この辺の山には未だ狼が住んでいるのだろうか、久馬造は急に不安を覚え、夜の明けるのを待った。

朝がきて辺りが明るくなつた頃、久馬造は起き上り、身支度をした。荷物をまとめ、身に着けてから、木に吊っていた鹿を卸ろし、両足を縄で括り背負つた。そしてその儘、山小屋には戻らず、北股の部落へと急いだ。

「熊」は昨夜行つた儘、もう戻つてこないかも知れないが構つていられない。早く鹿を米造の許に運び、捌いてもらわねばならない。背中の鹿が重いが、初めて獲つた獲物だ、置いてはいけない。昼頃、米造の家に着いた、昼めしを喰つていた。夫婦は表に出て迎えてくれた。鹿を卸したあと、お竹に頼んで昼飯の用意をしてもらつた。

「毛皮のええ若い鹿や、儂は捌くさけ、久馬はんはゆつくり休みなはれ」と米造は言つて鹿を裏手に運んで行つた。

その夜は米造の家で泊めてもらうことにした。鹿刺しと濁酒を飲み、鹿猟を話、昨夜聞いた遠吠えと、そのあと「熊」が居なくなつたことを話すと、米造は「やつぱし、儂はあれは普通の犬でないと思つた、顔はきつしいし、あんまり吠えやんし、体付きは狼に似てると思つたんや」と言つたあと、「もうほいで熊は山から戻らへんで」とも言つた。

久馬造もそれと同じことを考えていた。熊を西浦店から貰うとき榮一は「熊の母親は山で交尾て

きて子供を生んでしもた」と言つたことを思い出した。

紀州犬は元々、紀伊の国和歌山と三重南部で生れた犬で、他の種類の犬と交わることなく、自然のなかで育つた犬で、秋田犬より少し小さい中型犬で、見掛けは温和しいが、興奮すると人でも襲うこともあるという。もし山犬や野犬と交尾すると野生に戻ることも考えられる。

久馬造はあと一泊したあと、鹿の処分を米造に頼み家に帰つた。

年があけ大正十三年の春、茲<sup>こゝ</sup>二、三年の猟師の暮しで、すつかり山男になつた久馬造は、体調に異変を感じていた。むりな山歩きで足腰が疲れたのか、左股関節を痛めてしまつた。

檜ノ腹家の菩提寺は、南垣<sup>みなまがいと</sup>内の極楽寺<sup>ごくらくじ</sup>で、寺の和尚の光厳<sup>こうげん</sup>は鍼灸<sup>しんきゅう</sup>の治療もやつていた。喜寿を超えた高齢だが体が丈夫で、檀家の家々を廻り、池ノ窪でも月参りに来るので、その折寄つてもらつて、先祖供養と共に足腰の治療もしてもらつた。

久馬造は養生の傍ら、池ノ窪にある小作人の家を廻つた。死んだ寅楠は人々と懇切にしていたが、無口の久馬造は口下手であるが、地主の努めとして小作人との話し合いは必要である。

春先の農閑期にそれぞれの家を廻り、米の出来高や家人の暮し向きを聞いた。

猟の話になると、無口な久馬造も口が軽くなる。飼犬<sup>としかき</sup>だつた熊のことや、奥山での出来事も話にでてくる。八剣山で遠吠えを聞いたことを話すと、年嵩<sup>としかさ</sup>の人間は大方それを知つていた。「狼か山犬か分からんけど確かにそんなもんはいてるなあ」と言つていた。

又、寺の光厳和尚に足腰の治療をしながら聞いた話によると、「久木<sup>くき</sup>の山家<sup>やまが</sup>で昔、鶏が捕られたことを聞いた、始めは狐が捕つたと思つたが、猫も喰われて連れていかれたさげ、ありや、やつぱ

り狼か山犬やと言うてた」と語り、更に和尚は「儂ら子供の時分は山へ行くと狼が着いてくる、と言つて脅おそされたり、晩に狼の鳴き声を聞いたことがある」とも言つていたが村里には現れなかつた  
そうである。

昭和の代になつて、久馬造は五十、為吉は二十六歳になつた。相変わらず役場で戸籍係を努めて  
いるが、未だ結婚せず独身である。叔母のお照は見合話を幾度となく持つてくるし、両親も口喧し  
く勧めるが、本人は一向にその気がない。あまり煩うるさく言うと「ブイ」と横を向いて行つてしまふ。  
為吉は久馬造に似て無口で変屈な処がある。

久馬造は和尚の治療のお陰で元通りの足腰になり、又近くの野山に出歩くようになった。

西浦の隆市に頼んでおいた村田銃が手に入った。十六年式騎兵銃の改造品で、銃身が短く重量が  
軽い。単発式だが山鳥や兎を撃つにはもつてこいである。暫くこれで楽しめる。

北股の米造から頼りがあつた。猪が増えて山畑や稲田を荒らすので、打殺したいから手伝つて呉  
れないかと言う伝言であつた。昭和九年の秋である。

久馬造は檜ノ原家の当主として、一応落ち着き、安穩な生活をしていたが、米造の誘いに、又も  
や猟への意欲が燃えだし、再び山に行くことになつた。

やはり、猪には二十二年式村田の連発銃が適している。この銃と、米造への手土産に、西浦店か  
ら仕入れた銃弾を持つて北股に向つた。

ながちりゆう  
長逗留になるかも知れんので、家の事はお崎に任せ、為吉にも話しを通しておいた。

北股へは、年月が過ぎたが、通い馴れた山道であつた。米造の家に着くと、待つてましたとばか



り歓待された。

土産に持つてきた銃弾と、お崎の気配りでの米麦の入った袋を渡し、早速、明日からの猪狩りの相談をした。

明日の猟には、米造の猟犬「クロ」の他に、近所の若者とその飼犬が勢子として手伝つて呉れるらしい。若者は、長谷芳一と名乗つた。

当日、若者は朝早く犬を連れてやつて来た。

既に準備はできていた久馬造等は、早速、目的の場所に向つた。

山麓にある山畑から、山の中腹まで猪が通る獣道がある。「クロ」はこの道を通りながら臭いを嗅いで猪を探す。若者と犬はこれに従つた。

久馬造は、二手に別れ、谷の両側から下に向つて陣取つた。

こうすれば、犬が猪を追い出して走つてくると両方から狙い撃つことができる。

小一時間程過ぎた頃、遠くの方から犬の鳴き声が聞こえ、「ワン、ワン」と吠えたてる声が次第に近付いてくる。鳴き声がある谷の下を見ると、二匹の猪が駆け登つてくる。一瞬、久馬造は銃を構え、先頭の一匹を狙い、射程に入つた瞬間引き金を引く、二発を連射した。当つた、猪は走りながら倒れこんだ。そしてそれと同時に銃声が出た。米造が撃つたのだ。二匹目を狙つて撃つたのだ。犬が倒れた猪に向つて盛んに吠えたてている。

久馬造と米造は下に降り、顔を見合わせた。

「やったー」という気が顔に現れている。芳一もやつてきた、猪はどうやら親子のようである。

先頭の猪は親だ、大きい。三人掛りで猪の足を縛り、芳一の持つてきたおこ（てびんぼう）（天秤棒）にぶら下げ、久馬造と芳一がなかどった。米造は小さい方の猪を縄で括り付け、背中に背負った。

昼迄に二匹の猪を獲ったので、その日の午後は肉の解体に掛かった。又部落の者を呼んで各家に肉を分配したり、保存食の用意をしなければなるまい。

翌日から雨が降り、二日間、足止めされた。

四日目は少し寒いが良い天気である。今日の猪狩りを伝え聞いた部落の人達は集まり、手伝つて呉れるそうだ。なかには古い火縄銃を持ち出してくる者もあり、犬を連れた者もあった。久馬造は予備に持つて来た単発の村田銃を米造に貸し与へ、扱い方を教えた。

集まつてきた総勢十名余りの人々に、米造はそれぞれの持場を指図し、出発した。人数が多いと猪に警戒されるので、慎重に行動しなければならぬ。

この日は米造の気配りのある行動が功を奏したのか、五匹の大猟だった。久馬造たちは二匹を、部落の人は二匹の猪を仕留めた。

久馬造は北股に来てから、十日余りを過ごし、その後も計らつて狩りを続けたため大半の猪を捕獲することができた。

米造や部落の人たちから手厚い礼をうけ、久馬造は帰ることにした。芳一は米造等が造った土産物の猪肉と、干し茸などの荷物を持って池ノ窪まで送ってくれた。

昭和十年の正月を迎えた二月二日（この地方は旧暦の正月であった）米造は訪れた。正月の挨拶を兼ね、昨年の礼を述べたあと、未だ何か話がありそうなので、座敷に上げた。

正月の祝い酒を持って成し、囲炉裏の側でくつろぎながらの話であつた。

あれから猪の害が無くなつたが、近頃鹿が出て来て苗木の芽を食べたり、山畑の野菜を荒らしたりするとか、暮れに遠吠えを聞かなかつたが、八軒岳や釈迦岳に山犬がいて、鹿や兎を食べた跡があるとかの話であつた。

何れも村人の噂だか、奥山には何匹かの山犬が住みついているとのこととも伝え聞いた。

そして米造は更に、これは儂の想像だが、もし「熊」が狼か山犬に魅かされて奥山に逃げ交尾したのなら、その子供は生きているのではないかと思うとも話した。そして最後に久馬造さんがその気があるなら、鹿撃ちを兼ねて八剣山に登り、山犬の声を聞いてみる気は無いかとも言つた。

話し終つて帰ろうとする米造を、「正月休みやから、今夜は泊つていきなはれ」と引き止めた。

その夜、久馬造は床に就いてから考えに耽つた。又山に行つて狼をやりたい気持ちは充分あるし、もし米造が言つた通り「熊」の血を引く野犬がいるとすれば、一度この目かその声を聞いて確かめたいと思ひ、そして何れその日がくるだろうと考えた。

春がきて、久し振りに西浦雜貨店に立ち寄つた。父の栄一は既に亡くなり、息子の隆市が店主となり、家族と共に店を切り廻している。

隆市夫婦と四方山話をしたあと、隆市から一度田原医院へ行つて話を聞いてみて呉れと言われたので帰りに寄つてみることにした。

田原医院では此処も代替りをしていた。長男仙一が後を継いで妻と共に医院を営んでいた。

仙一は久馬造より二つ歳上で年齢のためか医師の貰祿が充分である。

応接室に招かれ、茶の接待を受けながら仙一から聞いた話は久馬造の長男為吉への縁談であつた。相手は当医院で女中としていたお朝の娘、徳子とくこで彼女は先代の茂造医師の口聞で和歌山市の病院で看護婦見習いをしていたが、今は戻つてきて田原医院の看護婦として働いているがもう適齡期が過ぎてしまった。年齢的には為吉と丁度良いと思うのだが如何だろうか、との話であつた。久馬造は仙一の気配りを感じながらも一度家族で相談してみると言つて歸つてきた。

久馬造は家へ戻る道々、氣むつかしい為吉は素直に結婚話に乗つてくるかどうか心配しながら歸つて来たが、その夜、夕飯の済んだあと、お崎と為吉に向つて仙一医師が話したことを聞かせると、お崎が「結構な話やないの、為吉、こんな良え話他に無いよ」と言つて為吉を見た。

結局、縁談は決まつた。為吉も以前から田原医院で徳子のことを見知つていて好感を持つていたのだつた。

縁談は早々にまとまり、秋の取り入れの始まる九月末に式を挙げることになつた。仲人は仙一医師夫婦である。

久馬造夫婦や妹のお照が一番氣にかけていた為吉の結婚が決まり、これで檜ノ原の家も安泰となつたとひと安心した。

お祝い気分のうち、秋の取り入れが終つた頃、久馬造は今年の正月に米造が来て話したことを思ひだした。そして未だ自分の体力のあるうち、もう一遍山に登り、一生の思い出の猟生活をして、できるなら「熊」の血を残した山犬がおるならば一度会つてみたいと考えていた。

昭和十年の十二月中旬、山へ登る決心をした。久馬造はお崎に向つて「もう一遍山へ行くけどこ

れは最後や、心配せんと留守を守つて呉れ、一週間程で戻つてくるさけ」と言つて準備にかかった。獵仕度を整えた久馬造は北股の米造の家に向つた。米造は留守であつたが暫く待つてゐると歸つて来た。妻のお竹と山畑へ行つていたらしい。

久馬造はもう一度八剣山へ行くことを話すと米造は「儂も一緒に行く」と言つて同行することになつた。一泊した翌日、先日の若者芳一も小屋掛けの手伝をするため着いていくことになつた。

三人の男はそれぞれと荷物を背負い五里（二十軒）の山道を登つていった。目指す八剣山へは昼過ぎに到着した。前に寝泊まりした山小屋は荒れていたので建て直すことにした。

当夜は狭い山小屋の中で三人がひと塊りとなつて夜を過ごし翌日から早速小屋の立て直しに掛つた。三日目になつて漸く出来上がり、午後遅く米造達は歸つて行つた。久馬造は連発と単発の二丁の獵銃を立てかけ、あとは食糧と夜具の整理をした。独りになつて漸く昔の自分を取り戻した気分になつた。今はもう身近に「熊」はいないが淋しさが無い。

翌朝、朝飯を済まし小屋を出た。連発銃を肩に掛け、万一の用意に夜具と食糧の餅を袋に入れ背負つた。鹿がおれば鹿を、兎がおれば兎を狩る心算だが特にその気が無い。山の景色と空気を味わえばそれで満足だ。山腹から頂上附近迄歩き廻り、途中餅を噛つただけで午後山小屋に戻つた。

山に来て五日目になつた、今日は山を下り山鳥か山鳩を撃つ心算で単発の獵銃に散弾を持つた。又山小屋に戻るとき、米造が帰りがけに仕掛けて呉れた兎捕りの罌を見て廻ることにした。一気に麓まで降り、谷川に添つた草地に出た。以前、雉子を止めた場所だ。この辺には山鳥が多いので、慎重に辺りを探し歩いた。

十二月も末に近づくと冷気が増す、今日は雲が多く雪が散ら着いている。人の気配のない山合いの谷は別世界だ。

山鳥は警戒心が強く、少しでも物音がするとすぐ飛立ってしまうので、銃を何時でも発砲できるよう散弾の薬莖を込め準備した。散弾なら特に狙いを定める必要はない。

谷川に添って下って行くと、風が無いのに前方の草叢が動いた。「ハッ」と気付いて銃を構える。大きな鳥が飛び立った。「山鳥だ」と感じた瞬間引金を引く。鳥は「バサッ」と音をたて草の上で落下した。

近づいてみると牡の山鳥だ。肉付が良い。鳥を拾い上げ空を見ると鉛色の雲が張り詰めている。雪も段々と激しくなってくる。小屋に戻ることにした。然し帰りには兎捕りの仕掛を確かめねばなるまい。道の無い山中を歩きながら赤松の木を目印に獣道をたどって行くと仕掛があつた。掛つている、兎が掛っている。灰色の毛皮をした山兎だ。久馬造は寅銃を開いて兎の足をはずした。雪は降り視界が悪くなってきたので二つの獲物を袋に入れ早々と山小屋に戻つた。

帰り着くと小屋周辺は雪が少ない。早速獲物の仕末に掛つた。山鳥は羽根をむしり取り、鉛の散弾を抜き取り片足ずつ二つに捌いた。一つの片足は骨付の儘、火であぶり今夜の夕食だ。兎は米造に教えてもらった通り皮を剥ぎ取り肉は塩をすり込んだ。皮は近くの水溜りで洗い、肉と共に小屋の外側に吊した。この寒さなら肉は腐ることはない。兎は帰りに北股に立寄り米造の土産にする心算だ。

翌朝、小屋の外に出た。寒い雪が積もっている。昨夜は大分降つたようだ。何気なく外を見廻した久馬造は驚いた。小屋の外に吊していた肉が無い、兎の皮も無い。何ものが取つて行つたのだろ

う。昨夜は静かだったので眠っていても何か物音がすれば気が付いた筈だ。

狐につかまされた様に久馬造は暫く呆然としていた。

暫く思案していたが今更仕方がない。明日で一週間目だからお崎に言っておいた通り帰る日だ。雪が少し積もっているが今日最後の一日を存分に「熊」の想い出を辿って見よう。

久馬造は身持えも充分に、僅かな食糧と銃と鎌を持って出発した。今日は最後だ、鹿が見付かれれば撃つてもよし、無ければ無いで良しと思いつながら以前熊が駆け登った道跡を登って行った。そして前に鹿を獲り一夜を明かした処、行ったとき思わぬ光景を目にした。以前、罅にした繁みの横の岩場に獣の屍骸があった。笹の葉を取って薄く積もった雪を拂い除けてみると、狼か山犬の屍骸の様だ。鎌で引掛け繁みの下に運び、入念に調べてみた。先程から予感がしていたが、何処か「熊」の体形に似ているように思える。毛皮は乾涸びて所々骨がむき出していて毛色は判らないが尻尾の形が熊と一緒だ。

久馬造は考えた。熊が病気が老衰で死を悟ったとき、自分と最後の一夜を過ごしたこの地を死に場所を選んだのではないかと。

暫く思案した後「これはやはり熊だ」ということに気付いた。そして昔、我が分身のように付き従ってきた熊のことを思い出し、改めてその死体を見入ったあと、持参していた袋の中身をその場に捨て、熊の亡骸なきがらを入れた。持ち帰って弔う心算だ。

そのあと急いで小屋に引返し、ひと休みして気分が落着いたとき、改めて考え直した。子供のときから飼いだめた熊は自分を慕っていた。然し山の暮しが続きだした頃から次第に本来の野性が目

覺めてきて自由な自然の生き方に引かれ去っていたのではないかと。

犬の遠い祖先は狼だ。そして紀州犬は元もと紀伊の地で純粹に育ってきた犬種で野性に近い。熊はやはり池ノ窪に伴れて帰るより、自然の山の中で眠った方が良いのではないかと思ひ直した。

そして、やはりこの八剣山に埋めてやろうと考へ小屋を出た。雪が降り積もっているが小屋の上の方に登って行つた。繁みの下の岩場に隙間がある。そこに骨を置き、上から落葉や枯れ枝で覆ひ埋めた。そして「これで良い」ここを安住の場所にしてやろうと呟き手を合せた。

久馬造は小屋に戻り「これで総てが終つた思ひ残すことはない」と自分に言い聞かせ、又この雪では北股へは寄るのは廻り道だし明日は池ノ窪の我が家へ歸つていこうと思つた。

雪の降る夜は静かだ。いろいろ考へ巡らせているうち寢入つてしまつた。

そして夜半を過ぎた頃か、微かに犬の遠吠えを聞いた気がする。夢現ゆめうつの中「熊が鳴いてる？いや熊の子供が鳴いている」と夢か現実か判らぬまま再び寢入つてしまつた。